

2004 年度前期文献演習学期末課題 B

- バルザックの『財布』における恋愛論について -

自分の愛を証明したいと思っても、自分が愛されているのかどうか知りたい
と思っても、恋愛主体は、確実な記号体系を一切もちあわせていない。

ーロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』

課題部分のテキストにおける恋愛の諸相を考察していきたい。まずイポリットはアデ
ライドと言葉で打ち明けあっているが、相思相愛である事はほとんど自明の如くテ
クストに刻印されている。

Sans s'être encore confié leur amour, les deux amants savaient qu'ils
s'appartenaient l'un à l'autre.(P251, L29)

この段階に到るまでに、もちろんさまざまな出来事(画家の転倒事故と救助、お返しと
しての肖像画の模写、多くの視線のやりとり)が二人を近づけたわけだが、ここで一つ
注意を引くのは彼らがもはやお互いの距離を縮めるために何の作為も介在していない
という点ではないだろうか。それは例えばこのような言葉で確認される。

Un penchant involontaire rendait l'union de leurs âmes toujours plus
étroite. (P252, L32)

意図的な好意というのは恋愛において間に依然距離がある場合において両者の距離を縮
める機能を背負い、一方通行的(私は君の気持ちはわからないが、君のためを想ってす
るの)であるのに対して、「自然な好意」が在りえるのは両者の間にもはや距離がなく、
双方向的(私は君の気持ちを、君は私の気持ちをお互い知っていて、何気なくする事)で
ある場合にしかありえない。つまり、

Entre eux il existait un échange continuuel de sensations...(P252, L30)

とこのように表明されてはいないが、愛の基盤(お互いがお互いを想っている関係)なく
して成立しない「自然な好意」が、逆説的に二人の結びつきの強さを裏付け、後はどち
らかが告白をすれば成就されよう状況である事が読者に予感させる。また、この意図的

な好意とほぼ同じ意味で否定されているある語に注目しておこう。

De part et d'autre, la même foi, la même délicatesse firent croître cette passion sans le secours de ces sacrifices par lesquels beaucoup de gens cherchent à se prouver leur amour.(P252, L26)

ここでもイポリットとアデライドの間に「意図的な好意」と同じく「犠牲」もなく情愛が膨らんでいく様子が示されている。しかしここで否定される「意図的な好意」と「犠牲」が実はこの小説の最大の仕掛けであるとは誰一人最後まで気づかない。

ある事件が起こる。イポリット、アデライド、二人の老紳士との間で行われたピケの際、イポリットが自分の財布を紛失するのである。このピケの際、彼は様々な疑念に苛まれ、みなに騙されているのではないのかと不安に思う。

恋をすると、人は最も信じているものまでしばしば疑う。

ーラ・ロシュフコー 『ラ・ロシュフコー箴言集』 348

彼にとってほとんど決定的とも取れるこの事件を前にして、彼は呆然と彼らを眺めることしかできない。盗まれたのは財布だけでなく、15 ルイと小銭、それだけなら未だしもこの事件が引き起こす必然的帰結として、

Hippolyte n'eut plus de doute sur la moralité de ses voisines; [...] aux prises avec l'atroce commotion causée par le renversement de toutes ses espérances.(P255, L30-34)

という希望や信頼の消失という状況に到らざるを得ない。この事件が事件たる理由は彼の希望も思い出も一挙に崩壊の危機に瀕する「致命的な真実＝la fatale vérité(P256, L22)」であるという事以外にはない。彼はその「致命的な真実」を容易に鵜呑みするのを避ける。

《Ma bourse sera tombée à terre, se dit-il, elle sera restée sur mon fauteuil.》(P256, L18)

Il y avait sans doute un secret dans cette action... (P256, L25)

このような必死の正当化もしかし事件のあの明白さの前に儚く潰え去る。友人の言葉もただただ彼を苦しめることしか出来ない。ではこの恋も希望が失われたのと同様に霧散するしかないのだろうか。

希望はより早く消えるかもしれないが、恋を殺しはしない。
—スタンダール『恋愛論』

イポリットのあるいは愛のと言えるかもしれない力とはこの逆境に置かれて存分に発揮される。彼は「財布を盗まれたにも関わらず」(P258 L31)、依然アデライドを愛しているのである。「致命的な真実」を頑なに拒否し、正当化していた彼が、もう一つの「取り返しのつかない真実」にこの状況で確認する。それは以前の愛以上の愛とでも呼べそうな確信的な真実であり、スタンダールの第二の結晶作用(「彼女は私を愛している」)の変形(「私は彼女を愛している」)のようでもある。

L'amour fait son profit de tout.(P258, L38)

というごく短いこの文章が「取り返しのつかない」愛の強さを簡潔に表明している。この一段と強固な愛を見出したイポリットは、

N'y a-t-il pas quelque grandeur à savoir que l'on aime assez pour aimer encore là où l'amour des autres s'éteint et meurt? (P259, L3)

という情熱/狂気を持つに到る。そして、ある夜アデライドのアパルトマンの半開きの扉越しに投げたイポリットの無関心な眼差しの先に彼女の苦しみが映る。彼は自分の眼差しと冷たさが投げつけた酷さに身震いし、財布はもう見つかり、彼女が自分を待ち望んでいたのではないか、という思いに駆られる。

愛する人を待ちわびて、ほんのわずかな遅れ(約束の時間、電話、手紙、帰還などの)にも引き起こされる苦悩のざわめき。
—ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』

彼はそのアパルトマンに足を運び、彼女の青ざめて痩せた横顔に疑いや憶測が吹き飛ばされる。彼女のメランコリーと悲哀と絶望に満ちた眼差しも彼の仕事で忙しく、苦しんだという一言で(彼に対する)不安の眼差しに変わり、(不在に対する、無関心の眼差しに対する)非難の様子も霧散する。そうして彼は、疑っていた事に赤くなり、未知の偶然に事件を帰す。もはや事件など無かったかのように事態は進み、実際には事件のせいで引き起こされた苦しみが共苦の相貌の相互確認を産み、再び双方向的な愛の基盤を見出すに到る。それも束の間、ル・セイニユール夫人の「お遊び(賭け事)をしましょう」(P261 L17)の一言であの事件から立ち直りかけたばかりの彼を再び不安が襲う。ピケを再び、アデライドとのパートナーとして行う事になった彼に最後の「運命的真実」が明かされ

る。アデライドが彼の前に出したあの彼の財布は、新たな財布として金のビーズで刺繍が施され、留め金やがま口も彼女の手で新しくなっているのである。

Il les vit tremblant de plaisir et heureuses de cette aimable
supercherie.(P262, L6)

この「親切的な悪戯」とは「意図的な好意」であり、「犠牲」でなくてなんであろう。彼女は実は自分の貯金も空にする犠牲にし、この意図的な好意を実行するという、甚だ彼女にとっては親切的な悪戯ともいえる大きな「賭け」をテーブル付近で行っていたのだ。

贈ったものを通じてあなたにわたしの「すべて」を与え、
わたしのファロスをもってあなたに触れるのだ。
ーロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』

愛を消尽させるほどの危険を冒したこの贈り物＝運命的真実に対し、彼に残されているのは、《Je vous la demande pour femme》(P262, L12) という告白以外にあらうか。

「親切的な悪戯」とは著者バルザックが「犠牲」や「意図的な好意」などないと二人の関係を言いつつ、実はこの最後の場面で真実を明かし、私を感動させた「親切的なぺてん」に思われた。ペテンを取り返しのつかない真実として成立させるこの小説には正直驚きました。またこの贈り物が冒頭で引用したバルトの言葉に対する、最大限の記号ではないだろうか、とふと頭を過ぎる次第です。

《参考文献》

Honoré de Balzac, *La maison du chat-qui-pelote*, Ed.GF Flammarion, 1985

スタンダール『恋愛論』大岡昇平訳、新潮文庫、1970

ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』三好郁郎訳、みすず書房、1980

ラ・ロシュフコー 『ラ・ロシュフコー箴言集』二宮フサ訳、岩波文庫、1989